

第1章 概観（国土、民族、社会、歴史等）

1. 正式国名

メキシコ合衆国（United Mexican States、以下、「メキシコ」とする）。メキシコの国旗は、緑・白・赤の縦三色で中央に国章を配している。中央の国章は1325年のアステカの首都「テノチティトラン（現在のメキシコシティ）」創設を表現している。なお、国章の「湖の中央の岩に生えるサボテンに蛇をくわえた鷲がとまっている」絵は、アステカ神話にある「そこに都を創設せよ」という予言に基づいている。



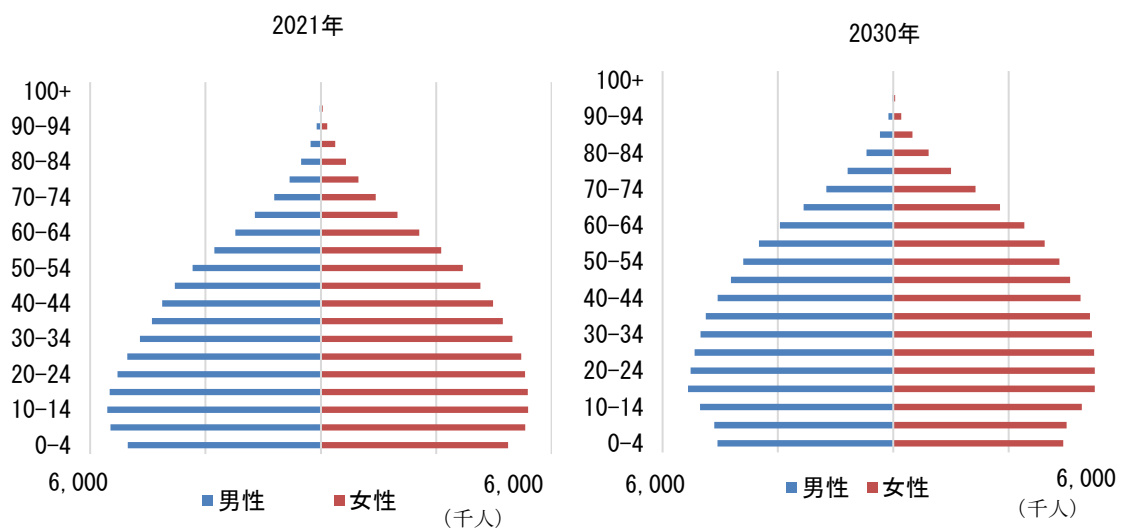
メキシコの国旗

2. 人口

人口は1億2,750万人で、世界第10位である（2022年）。2018年～2022年の人口増加率は年平均0.75%で、2021年に日本の人口（1億2,681万人）を超えた。2030年には約1億3,500万人（国連）に達すると見込まれている。

平均寿命は70歳（2021年：世界銀行）と比較的高水準である。また、年齢別の人口構成では若年層の人口比率が高く、40歳未満の人口が全人口の65%を占める（2021年）。2030年の40歳未満の人口も全人口の59%と予想されており（国連）、将来的にも労働力は豊富であると見ることができる。人口は都市部に集中しており、都市部の人口は全体の81.3%（2022年：世界銀行）と、2013年の78.7%と比べ上昇している。

図表 1-1 メキシコの人口構成



（出所）国際連合 Department of Economic and Social Affairs より作成

3. 国土

メキシコの国土面積は約 196 万 km² と日本の約 5.2 倍の大きさである。ラテンアメリカではブラジル、アルゼンチンに次ぐ第 3 位の規模で、世界では第 14 位である。北米大陸の南部に位置しており、国土の中央部の高原を挟んで西シエラマドレ山脈と東シエラマドレ山脈が南北に走り、太平洋岸沿いには南シエラマドレ山脈がそびえている。メキシコは国全体の標高が高く、首都メキシコシティの最も高度の低い地点でさえ標高 2,240m である。また、海岸線は 9,330km (5,797 マイル) に及ぶ。北部に隣接する米国との国境線は約 3,100km にわたり、地政学上重要な位置を占める。南部はグアテマラ、ベリーズに接している。

図表 1-2 メキシコ全図



ひとくちメモ 1: 首都での高山病に注意

首都メキシコシティの平均標高は 2,240m であり、最も低い地点でも 2,223m である。また、空気中の酸素は平地の 4 分の 3 程度である。日本人にとっては慣れない環境であるため体力を消耗しやすく、高地適応までは頭痛や動悸、息切れ、吐き気、不眠等の軽度の高山病の症状を呈する可能性がある。出張者には睡眠をとろうにも数時間おきに目が覚めてしまい、体調を崩す人も多いようだ。高地に適応できるまではなるべくアルコールの摂取を控え、水分を多めに摂ることが推奨される。

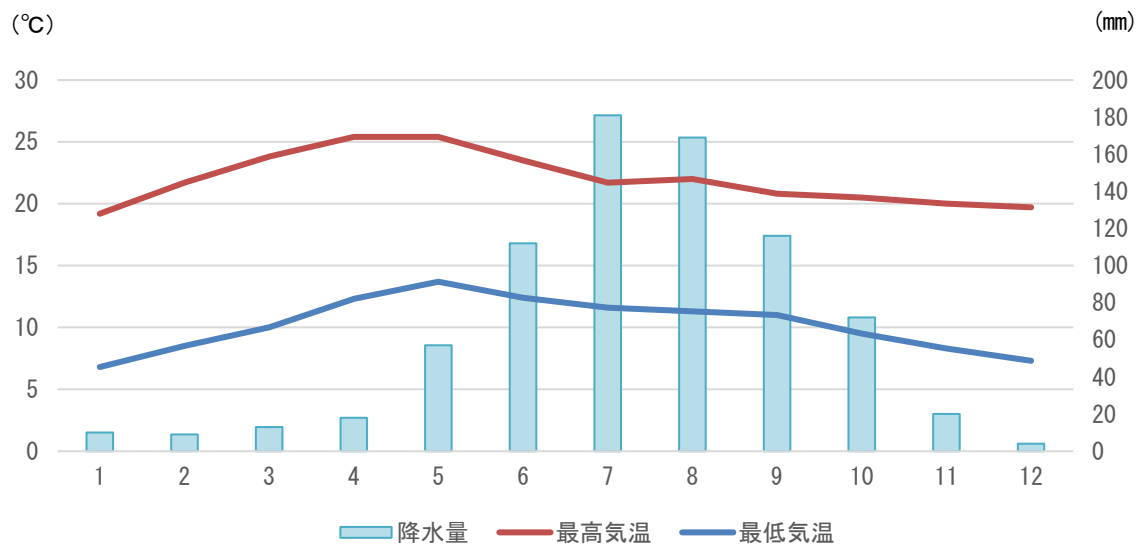
4. 首都

首都メキシコシティ（Mexico City）はメキシコの政治、経済、文化の中心地で、首都の人口は約921万人¹である。メキシコシティやカンクン等同国主要都市と日本との時差は15時間（サマータイム適用期間中は14時間）で、ロスカボスやラパスとの間に16時間、バハ・カリフォルニアとの間に17時間の時差がある。

5. 気候

メキシコの気候は、緯度や高度、山脈、海流等が要因となり、変化に富んでいる。メキシコ北西部は、夏と冬の寒暖差が激しく乾燥した気候であるが、メキシコ湾に面した南部は1年中高温多湿である。標高2,240mの高地に位置する首都メキシコシティは、最も気温の低い12月や1月であっても東京の春・秋程度であり、最も気温の高い4月から7月にかけても東京の初夏・秋程度と、年間を通じて温暖で過ごしやすい。メキシコには乾季と雨季があり、11月～4月は乾季、5月～10月は雨季と大別される。

図表 1-3 メキシコシティの気温（左軸）と降水量（右軸）



（出所）World Meteorological Organization より作成

6. 民族

メキシコの民族構成は、メスティーソ（スペイン系等の欧州系と先住民の混血）が60%、先住民が30%、スペイン系等の欧州系が9%、その他が1%程度となっている。欧州系人種や欧州系との混血が多く見られるのは、16世紀のスペイン人による侵略等が背景にある。

¹ メキシコ国立統計地理情報院（Instituto Nacional de Estadística y Geografía: INEGI）

7. 言語

スペイン人によって植民地統治がなされた歴史的背景から、公用語はスペイン語である。ただし、オアハカ州やチアパス州等、主に南部に居住する先住民族が人口の約 3 割を占めており、スペイン語以外に先住民族の言語が 60 以上存在している。

8. 宗教

メキシコ国立統計地理情報院 (INEGI) によると、9,786 万人 (人口の 77.7%) がローマカトリック教徒である (2020 年国勢調査)。このほかにもプロテスタント／福音派 (1,409 万人)、ユダヤ教 (6 万人)、イスラム教 (8 千人) 等の信仰が存在する。

ひとくちメモ 2: カトリック信仰と死者の日

スペインの植民地であった歴史を持つメキシコでは、ヨーロッパの文化を随所で見ることができる。特にクリスマスは日本の正月気分で、町中はクリスマスツリー等で飾られ、2 週間前から仕事を休みたいローカルスタッフもいるぐらい一番大事な祝日である。ヨーロッパ文化との強い結びつきは、メキシコの宗教的な祭日である死者の日 (Día de los Muertos) からも見取れる。カトリック教会の祭日である死者の日は、本来は死者の魂のために祈りを捧げる厳かな行事であるが、スペイン人がカトリックをメキシコに持ち込んだ際に、元々先住民が死者を祭るために行っていた信仰行事と融合され、メキシコ特有の祭日となった。ユネスコの無形文化遺産にも登録されており、映画「007 スペクター」やディズニー／ピクサー映画「リメンバー・ミー」にも死者の日のパレードの様子が取り上げられ、世界的にも有名な行事となりつつある。

例えば日本におけるお盆のように、世界中で死者を祭る行事があるが、メキシコの死者の日の様子は独特である。11 月 1 日、2 日の死者の日になると、町はマリーゴールドの花やカラフルな切り紙の旗 (パペルピカド)、かわいくデコレーションされた骸骨等で飾り付けられ、非常に華やかな雰囲気となる。死者に対する弔いの気持ちは日本と同様であるが、表現の仕方は日本とは異なっている。

【写真説明】 死者の日にちなんだ骸骨の置物



大きなクリスマスツリー

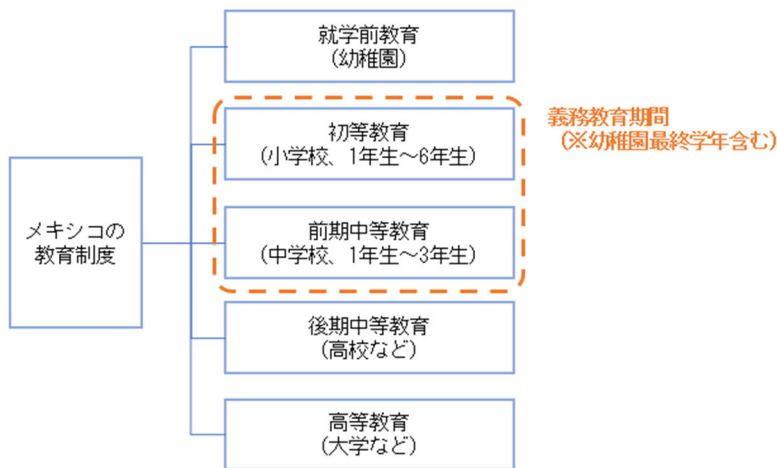


9. 教育

メキシコの基本的な教育制度は、初等教育（小学校）が1年生～6年生、前期中等教育（中学校）が1年生～3年生、後期中等教育（高等学校等）が1年生～3年生、高等教育（大学等）が1年生～4年生と、日本同様である。義務教育期間は5歳～15歳（幼稚園最終学年～前期中等教育最終学年である中学3年生）であり、当該期間は授業料・教科書代等の家庭負担がなく、無償で教育を受けることが保証されている。義務教育期間以降の教育は、高等学校、職業訓練校、専門学校、大学がある。とりわけ高等学校は義務教育の延長線上の位置づけというより、大学進学の前準備段階として浸透している。

UNESCOの統計によると、メキシコにおける高等学校後の第3期教育（大学や専門学校等）の卒業率は全国平均で31.9%（2021年）と世界平均（25.7%）に比べて6.2%高い。なお、2016年と2021年の卒業率を比較すると、メキシコは5.3%、世界平均は1.9%上昇しており、5年間の上昇率はメキシコが世界平均を上回っている。一方で、2020年の前期中等教育の出席率は92.8%と高い水準であるものの、後期中等教育は73.6%まで下落しており、家庭の経済的問題が原因で労働力として必要とされることから学校を中途退学する者も多いようである。

図表 1-4 メキシコの教育制度



ひとくちメモ 3：パハオ地域の学校情報

貧富の差が激しいメキシコでは、公立校と私立校では教育水準に大きな差があることから、ほとんどの日本人生徒は私立校に通っている。メキシコシティ、アグアスカリエンテス、イラプアトには全日制的日本人学校があるが、一部現地の私立校のレベルも高いため日本人駐在員の子女は、現地の学校に通うことも多い。メキシコの教育制度は小学校6年、中学校3年、高校3年と日本と同じだが、始業は8月と新学期の開始月が異なる。ほとんどの私立校は英語教育に力を入れているものの、学校によって、授業をすべて英語で行うところ、英語とスペイン語の両方で行うところと分かれている。また、日本人生徒の受入体制、宿題の量、家族参加のイベント数、通学バスの有無等、学校によってその特色は大きく異なる。学校を決める前には、事前に学校訪問をするとともに、可能であればすでに通学しているご家族からその学校の特色や他校との比較情報を入手することを強くお勧めする。

10. 通貨

メキシコの通貨はペソ (Peso)。補助通貨単位はセンターボで、1 ペソ=100 センターボである。2023 年 11 月末のレートは 1 メキシコ・ペソ=9.48 円である。

1994 年には国際収支の悪化を背景とした通貨危機が発生し、その影響はブラジルやアルゼンチンまで波及した (テキーラ・ショック)。通貨危機以前、メキシコの国際収支は短期資本の流入に依存していたが、通貨危機以降は長期資金の流入を推進している。メキシコの政策金利は米国に大きな影響を受けており、米国が 2015 年に 9 年半ぶりとなる政策金利の引き上げを決めたことで、メキシコは通貨防衛策として 2016 年に利上げを行った。その後は新型コロナウイルスの影響を受けた 2019 年~2021 年を除き上昇傾向にあり、現在の政策金利は 11.25%と過去最高値となっている。

11. 歴史

(1) 文明の興隆からアステカ帝国滅亡

紀元前 13 世紀頃に、メキシコ南部ではメキシコ湾を中心にオルメカ文明が形成された。2 世紀頃にはマヤ文明が興り、メキシコのみならずグアテマラ、ベリーズ、ホンジュラス、エルサルバドル各地に広がり影響を及ぼした。一方、メキシコ中央部においては、3 世紀頃にテオティワカン文明が開花したが、9 世紀頃には衰退の一途をたどった。その後、後期マヤ文明やアステカ文明が興隆し、後世に大きな影響を与えた。15 世紀頃になると、統一国家であるアステカ帝国が形成され、首都テノチティトランを中心にメキシコ中央部において栄えた。しかし、同時期、ヨーロッパ諸国は積極的に新航路、新大陸の発見のために海外進出を図る、いわゆる大航海時代を迎えており、1521 年にアステカ帝国は中米に遠征していたエルナン・コルテス率いるスペイン軍によって滅亡させられ、スペインによる支配の時代へと突入していった。

ひとくちメモ 4: 日本・メキシコの交流の歴史

1609 年にフィリピン諸島総督のロドリゴ・デ・ビベロを長とする一団の船は、当時のスペイン領メキシコへの帰途において千葉県沖で遭難したが、村人たちの献身的救助によって乗組員 317 名が命を拾うこととなった。ビベロー行は村からの歓待を受け、その後、徳川秀忠、徳川家康に謁見し、翌年徳川家康の支援によってメキシコに帰国することができた。このときビベロー行とともにメキシコに渡った日本人たちがメキシコ最初の日本人訪問者となった。さらに、1613 年 10 月には仙台藩主伊達政宗の命を受け、支倉使節団がメキシコに向けて出港し、1614 年 1 月にメキシコのアapulco 港に入港した。

これらの歴史的経緯から、2009 年は 1609 年からの交流 400 年を記念した「日本メキシコ交流 400 周年」とされ、2013 年~2014 年は「支倉使節団訪墨 400 周年:日墨交流年」とされた。

2023 年 1 月には、両国の外交関係樹立 135 周年を祝い、マルセロ・エブラル外相とメキシコ訪問中の林芳正外相が会談を行い、メキシコと日本の関係の重要性を強調した上で、将来に向けた新たな熱意をもって戦略的グローバルパートナーシップを推進することで合意した。また、今後数十年にわたる両国間の協カスキームを強化、更新していくと発表している。

(2) スペイン支配の時代から独立戦争

スペインの支配下に入ると、スペイン人の持ち込んだ疫病や過酷な統治が原因となり、多くの先住民族たちが命を落とした。スペイン支配下においては、スペイン王室によって植民者に先住民支配が寄託される植民地支配のシステム（エンコミエンダ）が導入されていたこともあり、収奪が繰り返された。一方、スペイン系等の欧州系と先住民の混血であるメスティーソの増加や、アフリカからの黒人奴隷の連行等も見られ、多様な民族構成となっていた。植民地時代には、サカステス銀鉱山の発見に伴い銀山開発が推し進められ、銀の大量生産は統治国スペインの財政を潤わせた。18世紀になると、アメリカ独立戦争やフランス革命が起これ、メキシコにおいても独立の気運が高まった。1810年9月16日にミゲル・イダルゴの蜂起を皮切りに独立戦争が始まり、11年後の1821年によりやくスペインからの独立を勝ち取った。

(3) 建国から混乱の時代

1824年にはメキシコ合衆国憲法が制定され、連邦共和国が樹立された。初代大統領には、グアダルーペ・ビクトリアが就任した。しかしこの頃、独立戦争やスペイン植民地体制の崩壊によって政治は混乱し、経済も大きな打撃を受けていた。一方で1846年に米国との間で勃発した米墨戦争によってカリフォルニアといった国土の半分を失う等、国内外の環境ともに厳しい時代を迎えた。

1876年になると、ポルフォリオ・ディアス将軍が軍事独裁体制を樹立し、その後35年間にわたり大統領の地位を独占した。この間、メキシコ史上初の長期安定政治が実現されたことにより工業化の進展や経済発展が進んだが、他方で貧富の差も拡大した。こうしたことから、民衆は独裁体制に対して不満を抱くようになり、1910年にメキシコ革命が勃発した。このメキシコ革命は1917年に革命憲法が制定されるまで続いた。プルタルコ・エリ阿斯・カジェスによって設立された国民革命党は1938年にメキシコ革命党、1946年に制度的革命党（PRI: Partido Revolucionario Institucional）と名称を変えていった。同政党は1929年に政権を握ると、以降2000年までの71年間にわたり政権が維持され、一党支配体制のもとで長期安定政治が実現された。

(4) PRI 一党体制から PAN 政権

PRIによって安定政権が維持される中、1950年代から1970年代まで、インフレを伴わない堅調な経済成長が実現し、「メキシコの奇跡」と呼ばれた。しかし、都市部と農村部の貧富の差は拡大し、PRIに対する不満も次第に高まった。1982年には債務返済不能に陥り、外国からの借款と石油輸出に支えられた経済は破綻した。政府は国際通貨基金（IMF: International Monetary Fund）の勧告に従い、緊縮財政やペソの切り下げを実施し、1986年には関税及び貿易に関する一般協定（GATT: General Agreement on Tariffs and Trade）に加盟したが、こうした経済路線の変更はPRI内部の分裂や国民生活の困窮を招いた。

1988年、PRIのサリナスが大統領に就任すると、1992年には北米自由貿易協定（NAFTA: North American Free Trade Agreement）を締結し、米国やカナダとの経済関係を深化させていったが、これに端を発して貧しい南部のチアパス州で先住民の解放を掲げるゲリラ部隊による武装蜂起が起こった。

2000年の大統領選挙では、国民行動党（PAN: Partido Accion Nacional）のビセンテ・フォックスがPRIに勝利して政権を奪取し、長きにわたったPRI政権が幕を下ろした。続く2006年の大統領選挙においてもPANのフェリペ・カルデロン候補が勝利して政権を維持することに成功した。カルデロンは大統領就任後、公務員年金等の改革、エネルギー政策、治安の維持に取り組んだものの、とりわけ治安については改善の傾向が見られず、多くの議席を失うことになった。

(5) PRIの再選と左派政権 MORENAの誕生

2012年の大統領選挙では、PRIのエンリケ・ペニャ・ニエトが当選し、PRIは与党に再び咲いた。ペニャ・ニエト政権は、主要3政党（PRI、PAN、民主革命党（PRD: Partido de la Revolución Democrática））の間で、諸改革推進のための与野党合意「メキシコのための協約（Pacto por México）」に署名し、労働、教育、通信、エネルギー、財政、政治・選挙制度等の改革に取り組んだものの、PRIによる長期支配と汚職の蔓延に対する反発が追い風となり、既成政党と一線を画す新興の左派政党である国家再生運動（MORENA）に支持が集まるようになった。

NAFTAの再交渉が行われている中、2018年7月に大統領選挙が実施され、MORENAのアンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール氏が当選した。ロペス・オブラドール氏は経済政策運営の枠組みに関して前政権から大きく変えない一方、最低賃金の引き上げや高齢者年金支給額の増額等、社会政策を中心とした歳出拡大に力を入れると主張している。

対外政策については、自由貿易を支持する立場でありながら、選挙期間中は内向きの政策提案が目についた。保護主義を全面的に掲げているわけではないが、前政権よりも対外開放政策の優先度は下がり、国内政策を強化していく方針も見られる。なお、2020年7月には米国・メキシコ・カナダ協定（USMCA）が発効された。

2024年6月に控えた大統領選挙に向け、与党（MORENA）からは直近までメキシコ市長を務めたクラウディア・シェインバウム氏が公認候補として選出され、野党連合からは上院議員であるソチル・ガルベス氏が候補として選出された。どちらの公認候補も女性であり、メキシコ初の女性大統領が誕生することが見込まれている。メキシコの現政権では最低賃金の引き上げや社会保障の拡充に重点を置いていることから、低所得者層からの支持が多く、一方で野党は汚職のイメージから人気低迷しており、次期大統領選挙では、現状、与党候補者の当選が有力だと報道されている。

図表 1-5 メキシコの歴史

時代	年代	歴史
文明の興隆からアステカ帝国滅亡	BC13世紀	オルメカ文明の形成
	2世紀	マヤ文明の興隆
	3世紀	テオティワカン文明の開花
	15世紀	アステカ帝国の繁栄
	1521年	エルナン・コルテス率いるスペイン軍によるアステカ帝国滅亡
スペイン支配の時代から独立戦争	1810年	メキシコ独立戦争
	1821年	スペインより独立

時代	年代	歴史
建国から混乱の時代	1824年	メキシコ合衆国憲法制定
	1846年	米墨戦争（～1848年、国土の半分近くを米国に割譲）
	1861年	フランス干渉戦争（債権国フランスによる武力介入）
	1910年	メキシコ革命勃発
	1917年	現行憲法公布
	1929年	国民革命党（現「制度的革命党（PRI）」政権掌握
PRI一党体制から、PAN政権、さらにPRIの再選	1938年	石油産業の国有化
	1968年	メキシコシティオリンピック開催
	1982年	債務返済不能
	1986年	GATT加盟
	1993年	APEC参加
	1994年	NAFTA発効 OECD加盟 通貨危機発生
	2000年	フォックス大統領就任（71年間のPRI政権が終焉）
	2005年	日墨の経済連携協定（EPA）発効
	2006年	カルデロン大統領就任
	2012年	ペニャ・ニエト大統領就任 環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）の交渉国がメキシコの交渉参加を承認
初の左派（MORENA）政権誕生	2017年	NAFTA再交渉開始
	2018年	アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール大統領就任
	2020年	米国・メキシコ・カナダ協定（USMCA）発効

ひとくちメモ 5：独立記念日

メキシコにとって一年で最も重要な日。それは9月16日の独立記念日である。1810年9月16日の早朝、グアナファト州にあるドロレス（現在はドロレス・イダルゴ）という町で司祭をしていたミゲル・イダルゴはドロレス教会の鐘を鳴らし民衆を集め、スペイン植民地政府に対する抵抗を呼びかけた。この際の演説を彼は「Mexicanos, viva México!（メキシコ人よ、メキシコ万歳!）」という叫びで締めくくった。この有名な演説はGrito de Dolores（ドロレスの叫び）と呼ばれ、毎年独立記念日にメキシコ大統領がこの言葉をメキシコシティのソカロの宮殿から叫ぶことが通例となっている。

【写真説明】ソカロ（メキシコシティ）

